オールジェンダートイレの平面計画の評価に関する研究

−男女トイレの一体型・分離型図面を用いたアンケートから−

A Study on Evaluation of All-Gender Toilet Plans

-Questionnaire with Integrated or Separated Plans of Men's and Women's Restrooms-

○太幡英亮（名古屋市立大学）*1　山下美桜（元 名古屋大学）*2

*1 Eisuke TABATA, Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City University,
2-1-10, Kitachikusa, Chikusa-ku, Nagoya, 464-0083, tabata@sda.nagoya-cu.ac.jp
*2 Mio YAMASHITA, (Former) Nagoya University,

キーワード:オールジェンダートイレ, 平面計画, LGBTQ, アンケート調査

1. 背景と目的

1.1. 社会的背景

Gender and sexual diversity（GSD）に関する理解と権利の保護については、国際的な課題の一つとなっており、近年建築分野では、性別に関わらず利用できるオールジェンダートイレ（以降 AGT）のデザインが論点となることが多い。

北欧やアメリカの一部の州などでは完全に男女の区分けを無くした AGT[1]が多く見られるようになったが（図１）、日本では試行錯誤の段階にあり、研究も途上にあるとともに、実際に整備された男女の区分けの無いトイレが度々混乱を引き起こしてニュースに取り上げられている[2]。

国ごとに AGT 普及度の違いが生まれる要因として一つは法的整備の状況が挙げられるが、日本では、労働安全衛生規則第 628 条や事務所衛生基準規則第 17 条に、便所は「男性用と女性用に区別すること」と明記されており、どちらも 1972 年に施行されてからこの項目は一度も改訂されていない。一方ニューヨークでは、1945 年施行の NYC Human Rights Law が 2019 年にジェンダー表現差別禁止法により改正され、新たに性自認や性表現も保護されるべきカテゴリーとして追加された[3]。そこでは、「休憩室、更衣室、その他の個人の性自認に一致する施設の使用の拒否を禁止する」と定められている。しかし漸く国内においても、2023 年 6 月の LGBT 理解増進法の制定[4]を契機に、まずは共通理解の醸成が図られようとしている。

1.2. 研究動向

身体的性別と性自認が異なる場合、自分の利用したい性別のトイレを利用できずにいる状況があるが、問題はそれだけではなく、広くプライバシーや防犯の課題を内包していると考えられる。さらに日本では障害者向け多機能トイレを「ユニバーサルトイレ」や「誰でもトイレ」として AGT に代用する運用が多いが、身体障害者のトイレ利用を阻害し非難されることもある。

田中・老田らは、公共トイレの男女共有化の可能性を検証するため、カフェなどに現存するAGTに対する意識調査を行った結果、若者ほどAGT にそれほど抵抗を感じず、高齢者になるほど強く抵抗感を感じる傾向があることがわかった。また、男女共用トイレを利用する際、女性は衛生面や性犯罪が起こりにくい工夫がされているか、男性はトイレの回転率が低下しないかを不安に感じることが多いことなどが明らかにされた[5] [6]。しかし、具体的な図面による分析はされていない。

金沢大学・コマニーらによる共同研究では、オフィスに限定した形ではあるもののAGTと男女別トイレの平面的配置についても調査した[7] [8]。アンケートによりシスジェンダーに対しトランスジェンダーが自認する性と一致したトイレを使うことについての抵抗感の有無を調査した他、男性用トイレと女性用トイレとAGT をそれぞれ設置する場合に好まれる配置についても調査している。しかし、あくまで男女別トイレとは別に補助的にAGT を設置した場合の検討であった。

1.3. 目的

そこで本研究では、平面図を用いた意識調査を行い、既往研究から推測した重要項目を元に、より具体的なトイレ計画の評価構造について分析する。プライバシーや防犯など様々な視点を考慮した AGT の平面計画に対する評価の構造を明らかにすることを目的とする。

Fig.1 Ex. of All Gender Toilets (Library Oodi, Finland)

2. 調査方法

2.1. 図面作成のための重要事項

評価すべき平面図案を検討するにあたり、本調査を実施した 2020 年時点で既往研究などを参考に、AGT を設計する上で重要であると推測した５項目は以下である。これをもとに評価対象とする平面型を作るための樹形図を作成した（図 2）。

① AGT を計画する際にまず重要になるのは、AGT のみを作るのか、男女別トイレと共に作るのかであると考えた。そこで、「男女別トイレの有無」と、男女別を有りとする場合の AGT への「接続種別（融合型・分離型）」を項目にあげた。融合型とは男女双方のトイレから AGT にアクセスできる型である。

② 実際に利用されている AGT に、内部が一体であっても入り口が二つあるものがある。そこで、AGT の入り口の数も評価軸になりうると推測した。

③ AGT と男女別トイレ両方を作る場合、その面積比（個室の数の相対的関係）も重要であると考えた。なお、既往研究[(7)] [(8)]では、好ましい位置関係について調査していたが、あくまで男女別トイレの補助的な意味で設置する場合の AGT の意識調査であったためである。

④ 洗面台の配置を重要項目の一つとして考えた。別の既往研究[(6)]での、男女共用利用が許容できるトイレ配置に対する意識を調査において、トイレが独立型（洗面含む個室型）である方が許容できる人の割合が高いことがわかった。ここから、洗面台の配置（個室内か共用か）が重要な判断材料であることが考えられたためである。また、洗面台が共用であったとしても、異性に身だしなみを整えるところを見られたくないと考える人も多いと推測し、洗面台が男女別か否かも重要であると考えた。

⑤ 日本の男性用トイレで現在一般的に利用されている小便器について、プライバシーの観点が指摘されることもあり、こちらも調査項目とした。ただし、この点は図面数を増やさないために文言のみで質問した。

2.2. 評価対象となる平面図

平面図案は大きく分けて、「A.男女別トイレがあり、それぞれから AGT に入れるもの」「B.男女別トイレがあり、それらとは分離して AGT が中央にあるもの」「C.男女別トイレがなく AGT のみのもの」の３分類を行った。その上で「個室内手洗いか共用手洗いか」「男女トイレと AGT の数のバランス」「AGT への入り口の数」などの条件の比較が可能な下位分類を作り、計 10 の平面型（図 1）を作成し、アンケートに用いた。これらの平面図は結果とともに示す。

2.3. アンケート概要

アンケート調査は 2020 年 11 月 4 日から 12 日の８日間でインターネットを通じて行った。質問項目は、年齢や性別（自由記述）、ジェンダーについて考えた事があるか、小便器使用の意向、カフェなどで AGT しかない場合の対応を聞いた後、A-C の基本３タイプ（A-1、B-2、C-5）の清潔性、内外での視線、防犯性、総合評価の評価を行った。次いで洗面台や面積比などを個別図面にて評価し、最後に自由記述を得た。詳細は結果とともに示す。

3. 結果

3.1. 回答者の属性など

284 件の有効回答のうち、自由記述の性別において 170 人が女性、103 人が男性と回答し、3.4%にあたる 11 人が LGBTIQ など[(注 1)]と見られる回答だった。年齢別では、20 代以下が約半数、30-40 代、50 代以上がそれぞれ約 1/4 を占めた。「ジェンダーについて考えたことがあるか」について５段階で聞いたところ、「考えたことはある（段階３）」が最多（41%）、次いで「考える（段階２）」「よく考える（段階１）」が続いた[(注 2)]。ただし LGBTQ などの全員は「考える」または「よく考える」と回答した。

3.2. 小便器使用の意向

男性用トイレを使用したことのある人に「小便器を利用するか」について質問した結果、男性の約 90%が「何も気にせず利用する」と回答した。男性の約 10%は「個室のトイレの方が良いがとりあえず利用する」「我慢できない時は利用するが我慢できれば利用しない」と回答し、特にジェンダーについて「よく考える」人の 25%は個室トイレを好む事が分かった（図 3）。

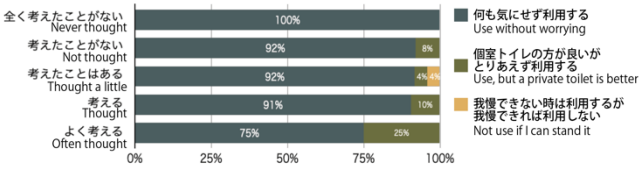

Fig.3 Concern for gender and Using urinals (Men)

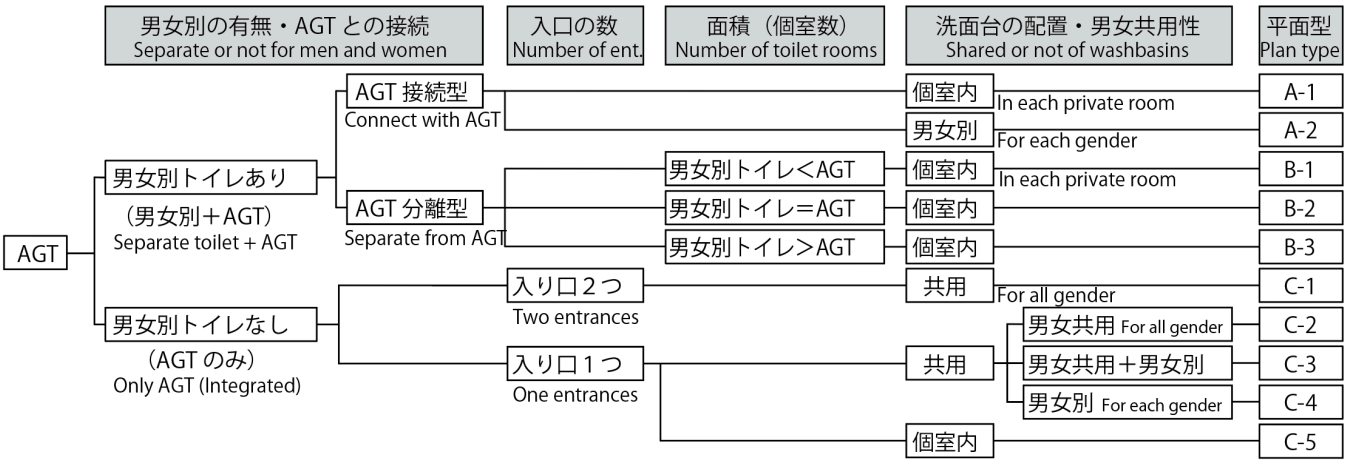

Fig.2 Tree diagram branched by key indicators of AGT

3.3. カフェなどで AGT しかない場合の利用意識

「カフェやコンビニ、居酒屋などで AGT しかない場合どうするか」という質問では、男性の約 80%、女性の約 30%が「何も気にせず利用する」と答え、男女で大きな差が見られた（図 4）。女性の方が異性とトイレを共有することを嫌がる傾向があり、理由（自由記述）は犯罪危険性や衛生面が挙げられた。また、ジェンダーについてよく考える人ほど、「我慢できれば利用しない」と答える人が多かった。

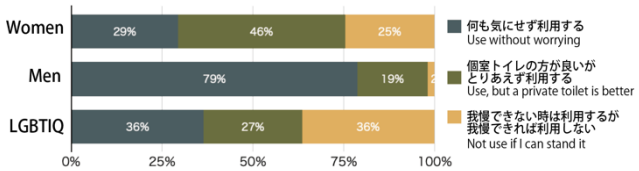

Fig. 4 Consciousness for using AGT by each gender

3.4. AGT が普及した際の不安な点

「将来的にAGTが増加したとして、AGTを利用する上で、特に不安に思う点や気になる点（選択）」の質問では、最も多く選ばれたのが「盗撮などの性犯罪が多発する」次に「トイレ内で異性と会って気まずい思いをする」となった。特に女性は「性犯罪」「不衛生」「自分の利用する前後に異性が利用」が多く、また男性は「一人当たりのトイレ利用時間が長くなる」「トイレ内で異性と会って気まずい思いをする」を選ぶ割合が高かった。

3.5. AGT が普及した際の良い点

「将来的にAGTが増加したとして、AGTを利用する上で、特に良いと思われる点（選択）」では、「子供連れの家族などが一緒にトイレを利用できる」を選ぶ人が最も多く、ついで「ジェンダー平等に近づいたり、ジェンダーについて考えるきっかけになったりする」「女性用、男性用のどちらかにのみ長い行列ができる事態を緩和できる」「多目的トイレを、障害を持つ方や要介助の方がより利用しやすくなる」が並ぶ結果となった。

3.6. 清潔性（平面図 ABC 評価）

3.6～3.10 の 5 設問では、図 1 の平面型 10 プランのうち、男女別トイレと AGT の関係性について、便器個数や洗面台などの影響を受けずに比較できるプラン A-1、B-2、C-5 の 3 種の図面を用いた（図 5）。

「清潔に保つことができると思うか」の質問では、B-2 の評価が最も高く「（とても）清潔にできると思う」と答える人が 70%を占めた。最も評価の低かったのが C-5 で、特に女性と LGBTIQ の 40%程度が「（全く）清潔にできないと思う」を選んでいる（図 6）。

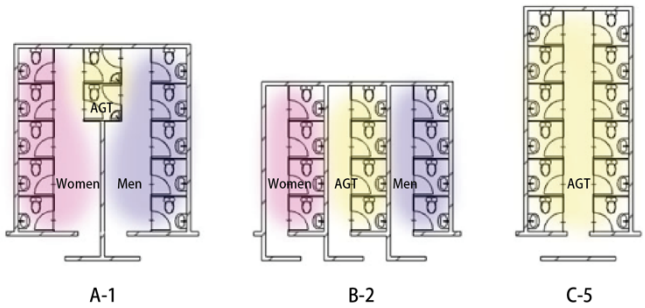

Fig. 5 Plan type A-1, B-2, C-5

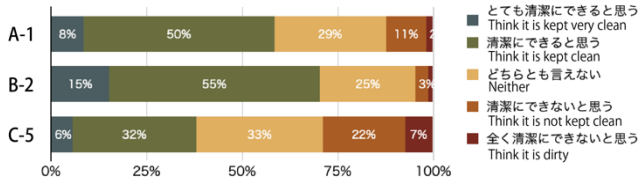

Fig. 6 Evaluation for cleanliness in each toilet

3.7. トイレに入る際の周囲からの視線（平面図 ABC 評価）

「トイレに入る際に周りからの視線が気になると思うか」という問いでは、A-1、C-5、B-2 の順に「気にならない」割合が高かった（図 7）。ただし、性自認における LGBTQ などは C-5 に入るときの視線が「気になる」と回答する割合が、他のプランよりも高かった（図 8）。また、この傾向はジェンダーへの関心が高い回答者も同様だった。

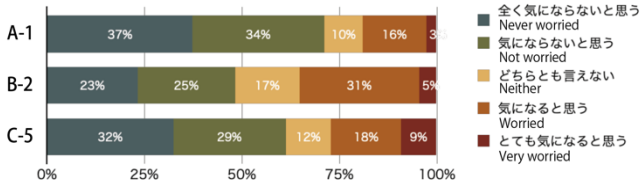

Fig. 7 Worrying about other people's eyes when entering each toilet

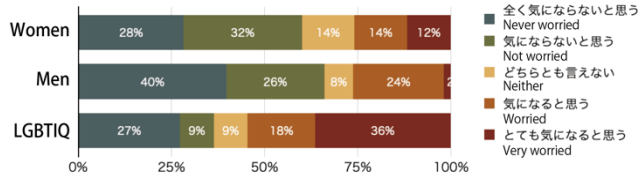

Fig. 8 Worrying about other people's eyes when entering C-5 for each gender

3.8. トイレ内での周囲からの視線（平面図 ABC 評価）

「トイレに入ってから、中での周りの視線が気になると思うか」の質問では、男女別トイレと AGT に分かれている B-2 では約 80% が「（全く）気にならない」と答えた。一方で AGT のみの C-5 の評価が最も低く、18%が「とても気になる」と回答しており（図 9）、異性とトイレ内で顔を合わせることに抵抗を感じる人が多いことがわかった。

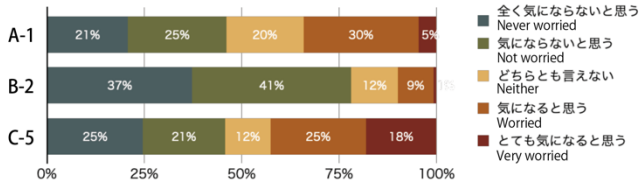

Fig. 9 Proportion of worrying about other people's eyes in each toilet

3.9. 防犯性（平面図 ABC 評価）

「トイレの防犯性についてどう思いますか」という問いでは、AGTに男女別トイレの双方から入れるA-1や、全てがAGTのC-5では約半数が「（とても）危険そう」と答えた。一方、B-2では約60%が「（とても）安全そう」と答えている。また、C-5について特に、ジェンダーへの関心の

高い人ほど「(とても) 危険そう」と答える割合が高かった（図10)。

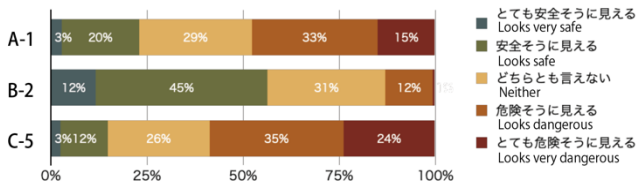

Fig. 10 Evaluation for crime safety in each toilet

3. 10. 総合評価（利用したいか）（平面図 ABC 評価）

どれを最も利用したいかを問う質問では、B-2 を選ぶ人が全体の 60%程度と最も多く、次いで A-1、C-5 だった。特に LGBTIQ などは 73%が B-2 を選んだ。他方でジェンダーについて「全く考えたことがない」回答者や男性は C-5 を選ぶ傾向があった（図 11)。

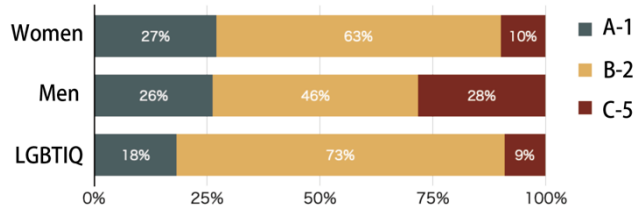

Fig. 11 Comprehensive evaluation in each toilet

3. 11. 男女別と AGT の面積比（平面図 B 評価）

男女別トイレとAGT の面積（個室数）の比が異なる 3 つの図面（図12）を見せ、どれを利用したいか尋ねたところ、AGTが広いB-1を選ぶ人が最も少なかった。各トイレの面積が等しいB-2は、その平等性と、そこからくるAGTの利用しやすさが評価された。現在の多目的トイレの形に似たB-3は、AGTを本当は利用したい人が、なぜわざわざAGTを使うのかと周囲に訝られるのを恐れて利用しづらいのではないかという意見が多く見られた。また、人数比に合っているからという理由でB-3を選ぶ人も多くいるようだった。また、ジェンダーについてよく考える人はB-3を選ぶ割合が低い結果となり、現在よく見られる男女別トイレと多目的トイレのあり方はジェンダーの観点から見ると評価が低いと考えられる（図13)。

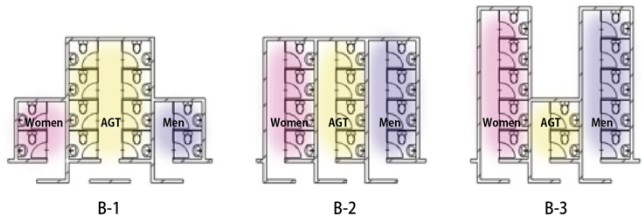

Fig. 12 Plan type B-1, B-2, B-3 (Number of toilet rooms)

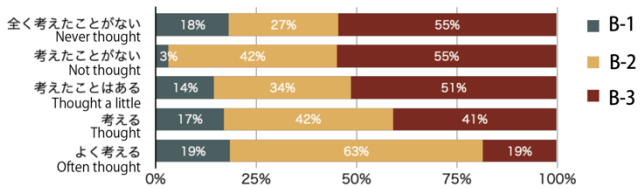

Fig. 13 Concern for gender and evaluation of B plans

3. 12. 洗面台の配置（平面図 A 評価）

洗面台の各個室内への配置と個室外での共用配置（図14）では評価に大きな差はなかった（図15)。A-1を選んだ理由として洗面台をゆっくり利用できるという利点、A-2を選んだ理由としてドアを開けた後に手を洗えるという利点が指摘され、洗面台利用の快適性や衛生面を気にする回答が多かった。個室や洗面台の回転率低下も評価に影響していた様である。

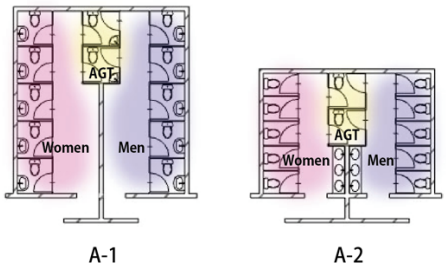

Fig. 14 Plan type A-1, A-2 (Shared or not of washbasins)

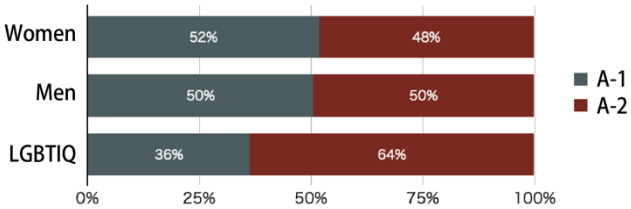

Fig. 15 Gender and evaluation of A plans

3. 13. AGT における洗面台の男女共用性（平面図 C 評価）

オールジェンダーの洗面台のみの場合、オールジェンダーと合わせて男女別がある場合、男女別洗面台のみの場合の図面（図16）を用いて、どれを利用したいか質問した。結果として、オールジェンダーの洗面台があるC-2、C-3の評価が高く、ジェンダーへの関心度が高いほどその傾向があった（図17)。女性が最も評価したのはC-3で、手を洗うだけのときはオールジェンダーのもの、身嗜みを整えたいときは女性用スペースを利用できる点が評価され、男性の化粧にも対応する平等性も指摘された。

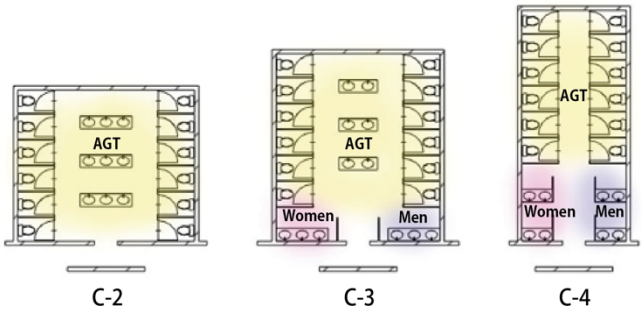

Fig. 16 Plan type C-2, C-3, C-4

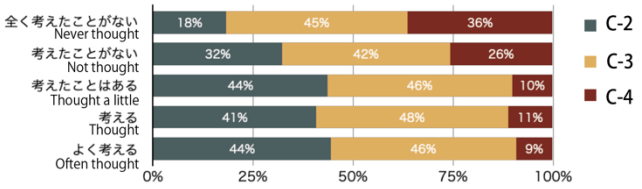

Fig. 17 Concern for gender and evaluation of C plans

3.14. AGT の入り口の数（平面図 C 評価）

北欧のトイレでも実例が見られる左右２箇所に入り口があり男女の領域が緩やかに分けられたものと、入り口が１箇所の図面（図 18）を比較し、どちらを利用したいか聞いた。評価に大きな違いは見られなかったものの、女性は C-1 を、男性は C−２を選ぶ傾向が見られた（図 19）。また、年齢別に見ると、高齢層ほど C-1 を評価する傾向が見られ、完全な AGT よりも緩やかな領域分けが評価された（図 20）。

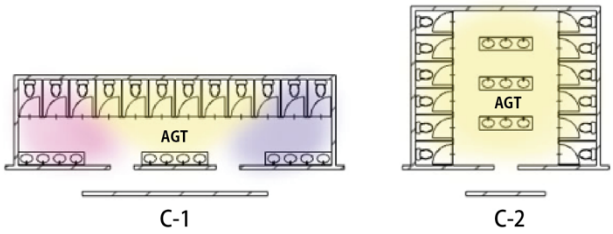

Fig. 18 Plan type C-1, C-2 (Number of entrance)

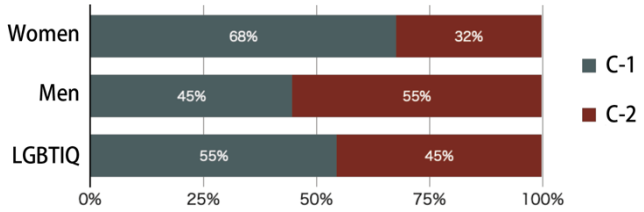

Fig. 19 Gender and evaluation of C plans

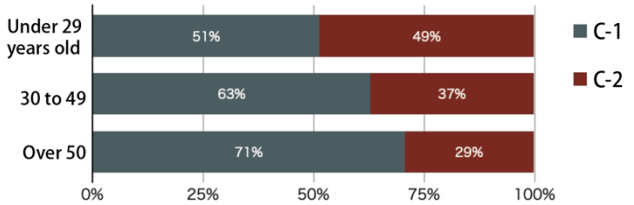

Fig. 20 Age group and evaluation of C plans

4. 考察

4.1. 得られたデータについて

自由記述式の性別記入において、LGBTIQ などと判断できる回答は 3.4%（11 人）に留まり、その部分だけでは参考値と言えるが、男性・女性という回答との比較を通じて、評価の相違が明らかになり有意義な知見となった。また、LGBTIQ などの回答者は、ジェンダーについてよく考える傾向も見られた事は、以降の分析結果を捉える上で有効な観点である。

年齢別にもバランスよく回答が取得できたが、年齢による違いはさほど大きくはなく、明確に捉えられた部分のみ結果にて説明した。

また、各設問で得られた自由記述の内容は多様であり、全ての設問や平面タイプに対して肯定否定の両意見が存在したが、その一部は結果と考察の中に記載した。

4.2. 小便器使用を望まない男性は１割程度

男性のおよそ１割程度は、小便器よりも個室を使用したいと考えていることが分かった。特にジェンダーについてよく考える層にその傾向があることから、今後多様な性自認や、性自認に関わらずプライバシーにより配慮したトイレを設計するにあたり重要な視点となる。小便器の間隔を広げたり、衝立を設置することも有効だろう。

4.3. AGT 設置の際の注意点：女性用トイレの確保

カフェなどで AGT しかない場合の利用意識が男女で大きく異なることが分かり、女性は異性とトイレを共用することを望まない場合が多い。個室数が多く確保できない状況でも極力女性用を設置することが重要と言え、現在でも多いその様な運用は妥当である。

また、AGT に対する男女の懸念点は異なる。女性は性犯罪や不衛生になることを最も懸念し、男性は回転率の低下や異性と会って気まずい思いをする点を挙げている。完全 AGT 化が失敗する際は、こうした視点の軽視が要因となる場合もあろう。

4.4. 防犯・清潔・プライバシーの観点

トイレに入る時と入ってからの視線評価は逆転する。男・女・AGT が等しく計画された B-2 では、入る時の視線が気になる一方、入ってからは気にならない。完全 AGT の C-5 は、入る時はさほど気にならないが入ってからが気になる。ここからも AGT 設計の困難さが伺えるが、トイレ自体のプランニングや、建物への設置場所の工夫で解決できる可能性も残されている。

防犯性や清潔性の評価の観点では完全 AGT の C-5 の評価は最も低く、男女と AGT をそれぞれ設置した B-2 の評価が最も高い。また、この評価軸が「どのトイレを最も利用したいか」で測られた総合評価に大きく影響していると考えられた。特に、女性や LGBTIQ などが男女別トイレと AGT が等しく別々に計画されたプランを最も評価した点は、重要な知見である。

4.5. 男女別トイレと AGT の面積比

現在では、もともとのユニバーサルトイレを AGT として運用する場合が多いことから、男女別と AGT の面積比が大きい B-3 に近い。しかし結果として、ジェンダーへの関心度が高いほど B-3 の評価は低く、男・女・AGT が等しく計画された B-2 の評価が高くなった。今後性自認の多様性に配慮した計画を進める場合に、B-2 タイプは一つのオルタナティブとなるだろう。

4.6. 洗面台についても選択的であること

洗面台の配置を変えた図面の比較によって明らかになったのは、洗面台を個室内ではなく共用として設置する場合に、オールジェンダー共用を設置することに加え、男女別の洗面台を置くことの意味である。C-3 は男女ともに異性の視線を気にせず身だしなみを整えることを可能にする一方、男女の区分を可視化してしまう難しさもある。

また、完全 AGT とした場合特に洗面などの共用スペースの広さや視認性、安全性に配慮する必要がある。

4.7. 入り口数の違いから分かること

完全 AGT とした場合にも、平面計画の工夫によっては男女の緩やかな領域性を作り出すことも可能である。女性や LGBTIQ などでは、こうしたプラン（C-1）の評価が比較的高かった点は興味深い。また、この比較においては、年齢による違いが読み取れ、高齢者ほど緩やかな領域性を好んだ。AGT が一般化していない現在においては、平面計画の工夫によって一体化と緩やかな領域化を両立させることの意義が示唆されたと言える。

5. まとめ

まず、いずれの平面計画でも、評価する人と評価しない人の双方が存在し、メリットとデメリットの双方を抱えていると言える。その中でも回答者の属性と評価の関係を読み解くことで前述の評価構造が明らかになった。これらを手掛かりとして実際のトイレ計画を検討することができるだろう。

完全に AGT のみの平面計画は、衛生面や防犯面で評価が低く、ジェンダーに関心のある人々や女性、LGBTQ などの評価も相対的に低い。小便器使用の意向の結果も考慮すると、トイレ計画はプライバシーや清潔性・防犯性を含めて総合的視点で計画すべきであり、AGT のみでは問題がある。タイプ B の様な選択肢を持たせた計画に可能性があるが、入る時の視線を気にすることなく使用できる計画が期待される。この点は、単にトイレのプランニングだけでなく、建築全体の計画の中で検討すべき事項である。さらに、洗面の選択性や緩やかな領域性といった設計の可能性も考慮しつつ、混雑緩和や子連れ利用といったメリットも踏まえた AGT の導入を検討していく必要がある。

本論文は、名古屋大学工学部環境土木・建築学科建築学プログラム卒業研究[9]で山下が筆頭著者の研究室で取り組んだ研究の成果である。成果の一部は名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリーが刊行する GRL Studies[10]にて報告された。調査にあたり榊原千鶴 名古屋大学男女共同参画センター教授（2020 年当時）の協力を得た。

文　献

(1) Norr（2019 年 7 月 22 日）: 男女別で別れていないスウェーデンのジェンダーフリートイレ：https://norr.jp/swedish-japanesetoilette/ （参照日 2023 年 8 月 13 日）

(2) 東京新聞（2023 年 8 月 3 日）: ジェンダーレストイレわずか４ヶ月で廃止新宿歌舞伎町タワー「安心して使えない」抗議殺到の末に：https://www.tokyo-np.co.jp/article/267703（参照日 2023 年 8 月 13 日）

(3) New York State : Human Rights Law Protections for Gender Identity & Expression : https://dhr.ny.gov/genda#:~:text=In%202019%2C%20the%20Human%20Rights,by%20the%20Human%20Rights%20Law.（参照日 2023 年 8 月 13 日）

(4) 内閣府 : 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律：https://www8.cao.go.jp/rikaizoshin/index.html#law（参照日 2023 年 8 月 13 日）

(5) 田中直人,老田智美 : 専用・優先・共用の施設利用対象概念からみた全国主要自治体における多目的トイレの整備変遷状況に関する調査研究，日本建築学会計画系論文集 591 号，65-70，2005.5

(6) 田中直人,老田智美ら：−公共トイレの男女共用化の可能性に関する研究　その１～その３，日本建築学会大会学術講演梗概集（中国），677-682，2017.8

(7) 国立大学法人金沢大学・コマニー株式会社・株式会社 LIXIL：オフィストイレのオールジェンダー利用に関する意識調査報告書公開用資料，2019.5

(8) 高橋未樹子,日野晶子,岩本健良ら : −オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究　その１～その４，日本建築学会大会学術講演梗概集（東北・北陸），2018.9・2019.9

(9) 山下美桜 : オールジェンダートイレの計画と評価に関する研究，名古屋大学工学部環境土木・建築学科令和２年度卒業論文, 2021.2

(10) 太幡英亮,山下美桜：ある態度を表明して、建築は存在してしまう―オールジェンダートイレをいかに設計すれば良いのか，GRL Studies Xol.3, 52-55, 2021.3

(注 1)「ゲイセクシャル」「社会的には女性」など、明確に「男」「女性」などと述べていない回答を LGBTIQ などとした。

(注 2) 5 段階の全てで、10 名以上の回答が得られているため、棒グラフでの比較は妥当なものと判断した。